

博士論文（要約）

ネップ期ソ連における集団主義と性
—アレクサンドラ・コロンタイを中心に

北井 聡子

● 全体要旨

1. 男だけのユートピア

本研究の目的は、アレクサンドラ・コロンタイ（Александра Коллонтай）（1873-1952）の思想を中心とした、初期ボリシェヴィズムにおける「集団主義と性」の問題を明らかにすることにある。共産主義国家とは労働者の共和国であり、そして労働者とは、働ける成人男性が基準となっていることを考えた時、ボリシェヴィキが創り出そうとした労働者のユートピアが、ミソジニックな傾向を肯定していくことは当然の成り行きであった。勿論、ボリシェヴィキは、男女平等を理念として掲げており、建前上は女の解放を歓迎すべきものとしていたが、その解放とは、基本的に「女を男にする」ということ以外の何物でもなかった。エリオット・ボーレンシュティンは、著書『女なしの男たち』¹において、1920年代のソ連文学には、「男だけの共同体」を創りだそうとする強いパトスが反映されていることを指摘している。とはいえ、ボーレンシュティンの議論でより興味深い点は、「女が如何に不在であり、排斥されたか」ではなく、幾ら熱心に女を駆逐しようとしても、男たちの同志的絆を媒介する為に、常に「女」が召喚されてしまう事態が描かれている点にある。それは亡霊のような身体なき女や機械、あるいは死んだ女の場合もある。女は殺され、抽象的な概念にまで縮小されながらも、完全に駆逐されることはない。我々は、ここに「ホモソーシャル性とホモセクシュアルは切れ目のない連続性の中にある」というあのセジウィックの論理が繰り返されていることを確認するのである。男は、男らしくあるために、対立概念としての女を必要とし、男たちのホモソーシャルな集団を維持するために、異性愛を介在させて同性愛の疑いを避けなくてはならないのだ。

さて本研究で、取り組みたいのは、男たちによるこの「女の排除と包摂」のプロセスと、表裏一体の関係にある、女性を男たち集団世界の一員にする為のアレクサンドラ・コロンタイの闘いである。大半のボリシェヴィキにおいては、経済制度が共産主義体制へと移行し、家事労働・子育ての共産化を通じて家父長的家族が解体されれば、女は自動的に全員労働者になる、という認識が支配的であった。つまり女の解放とは何か特別な措置を取る必要もないことだった。しかし家父長制とは、外的な構造（経済・社会制度）のみならず、言語システムや精神構造等、人間の内部に組み込まれたものであって、また性愛行動というリビドーが働く磁場においてパフォーマティヴに日々再生産されていくものなのである。コロンタイは、恐らくボリシェヴィキにおいてただ一人、家父長制の内部構造そのものの解体を模索した人物だといえる。現在に至るまで、彼女は、自由恋愛の提唱者であるとか、「水一杯論」というフリーセックス運動を推進したなどと誤解されているが、彼女の性愛の論文や小説において示した解放の手つきは、そのようなものを凌駕する別次元のラディカルさを有している。本研究では、彼女がアナーキーな性愛を称揚したと誤解される原因となった小説『三代の恋』のヒロイン、ジェーニャの謎を解読することも目標の一つとしているが、ジェーニャの過激な性愛の実践は、家父長制を維持する原理や言語構造を揺るがすことで、人間精神の脱構築に挑むことになる。まさに革命の名にふさわしい生そのものの根本的な改造と言えるのだ。

¹ Eliot Borenstein, *Men without Women: Masculinity & Revolution in Russian Fiction, 1917-1929* (Durham: Duke University Press, 2000).

またコロンタイの思想においても一つ特筆すべき点は、女の〈男化〉を徹底的に追求したことにある。そのラディカルさは、社会的性差の克服のみならず、身体構造の変化、つまり生物学的な性まで男にすることを視野に入れていたと言える。とはいえ、彼女も男／女の二分法自体を疑問に付さなかった為、宿命的なジレンマを抱えることになる。つまり、誰かが「女から男になる」時、別の誰か（あるいは何か）を「新たな女にしてしまう」ことになる。1922年に彼女は「（2年前の）内戦期には人々には唯一「革命」という偉大な女神しか存在しなかった」と述べている。ここでいう2年前とは、「真の共産主義が実現していた」としばしばボリシェヴィキが理想化した戦時共産主義時代（1917-21年）のことであるが、コロンタイは、その時、全ての人間が労働者（男）になっており、女のステータスを与えられたのは、革命という「概念」であったとしているのだ。人間の女が駆逐されたこの状態こそが目指すべき理想といえる。しかし、コロンタイの小説作品において、ヒロインが労働者（男）になってジェンダーの変更に成功した際には、ブルジョワ階級や墮落した人間等、イデオロギー的に未熟な誰かが「女」にさせられている。本研究は、このようなコロンタイの攪乱的な性の議論におけるジェンダー／セクシュアリティのエコノミーの構造を検討する。

2. 転換期1921-1922年

本研究では主にコロンタイの思想や小説作品の分析をしていく訳だが、とはいえ彼女の生涯の全活動を通史として扱うものではない。第一章の前半を除き、中心となるのは1921年から1927年という短い期間に書かれた性愛や女性問題に関する著作である。1921年とは、ネップ（新経済政策）の開始というソビエト政権全体にとって決断の年であったが、その翌年は、コロンタイの個人的な人生においても17歳年下の夫ディベンコとの離婚を経験した転換点であった。この1921-22年を境として彼女の思想に変化が現れ、またコロンタイの最も有名な一連の恋愛小説や性愛に関する論文は、1922-23年に全て書かれていると言って良い。

ネップとは、革命と内戦によって荒廃した国内経済を立て直す為に導入された部分的な資本主義経済政策であり、1928年に第一次五カ年計画と農業の集団化政策が開始されるまで継続されたものだ。戦死、穀物の強制徴発や1920年の大飢饉による餓死、チフスの大流行による病死等があり、人口の80%以上を占める農民の不満は極限状態に陥っていた。この状況を受け、1921年の第十回党大会で、導入されたのは、食料の割当徴発を現物税に変えることであった。これにより余剰生産物の販売が可能となった農民たちの生産意欲は著しく回復することになる。その後、貨幣経済の導入、私企業の復活等が認められ、1926年頃には経済は戦前の水準にまで回復することに成功する。とはいえ、資本主義経済を導入したことに対し、ボリシェヴィキ内では、当初より批判があり、コロンタイもレーニンと激しい論争を繰り広げることとなる。

さて、ネップ期におけるボリシェヴィキの特殊な現象の一つは、彼らが公の場で盛んに性について語っていたことだ。この問題に関してエリック・ナイマンが『公共の中の性』²で示した説は、非常に興味深いものである。彼の見解によると、イデオロギー的問題は、人間の肉体を媒体とすることで感情や想像に直接訴えかけることが可能となる。であるが故に、ボリシェヴィキは、1920年代のネップに対する

² Eric Naiman, *Sex in Public: The Incarnation of Early Soviet Ideology* (Princeton: Princeton University Press, 1997).

イデオロギー的不安や、内部に忍び込んだ資本主義に目を光らせていなければならないという危機感を、身体的な言語に置き換えて、大衆動員的手段としていったというわけだ。ナイマンの議論は、本研究でも大いに参照することになる。

● 各章概要

第一章「父のいないユートピア」

この章では、コロンタイが理想とした集団主義世界とは、そもそもどのようなものだったかを検討していく。前半では、十月革命以前に書かれた論文「実証主義的観点からの道德問題」（1905）の内容を、その当時交流のあったアレクサンドル・ボグダーノフの思想と比較し読み解いていく。この考察を通じて、彼女の求める集団世界のイメージが、ウラジーミル・ソロヴィヨフの「全一」哲学を継承するものであること、そして、家長的家族を消滅させるという彼女の強いパトスは、「全一」的な世界観と19世紀後半の女性解放思想とが融合した結果であることが明らかとなる。ボリシェヴィキの家族政策は、その〈破壊〉に焦点が当たってきたが、むしろ「一なるもの」への〈統一のための破壊〉であると言えるのだ。また従来、コロンタイとの繋がりが強調されてきたレーニンであるが、コロンタイと彼の間にある根本的な思想の相違も明らかとなる。即ち、レーニンの「前衛」理論においては、一部のエリートが大衆に革命意識を注入することで、共産主義を達成することが想定されていたのに対し、コロンタイの考えでは、革命意識は大衆の内部から湧き上がるようにして生まれるものであり、やがてこの意識は、全ての人間を一つに統合することになるという。このような全一状態は、「絶対者」「神のような存在」とも表現されるのだが、ここに感じられるのは、東方キリスト教の教義である「神化」のプロセスとの繋がりである。

後半では、1921年の第十回党大会における、レーニンと、コロンタイ率いる党内分派である「労働者反対派」との激しい政治闘争を見ていく。前半で述べた両者の思想の相違は、ここで大きな論争に発展し、党大会の最後には「労働者反対派」は「アナルコ・サンディカリズム」として断罪され大敗北を喫することになる。以後コロンタイは、公にレーニンを批判した形跡はないのだが、自身の主張をフィクションの世界へと移行させることになる。その一つが、1923年に発表した中編小説『偉大なる恋』である。これは党大会でのレーニンとの対決を恋愛物語に変換したものであると考えられるのだが、注目したいのは、レーニンが大会中にコロンタイたちを「病」のレトリックでもって繰り返し執拗に批判していたことだ。これに対し小説では、レーニンがモデルと思われる人物セーニャが、精神病であることが判明する。つまりこれは父殺しの物語であり、コロンタイが目指した共産主義世界とは、父（レーニン）なき、兄弟たちが織りなす水平的な集団であることが明らかとなる。

第二章「『働き蜂の恋』-女たちの絆の切断」

1923年のコロンタイの小説集『働き蜂の恋』に収められた三つの作品（『姉妹』『ワシリーサ・マルイギナ』『三代の恋』）の分析を行う。従来これらは互いに関連したものとして読まれてこなかったが、本研究では三作品全てが「女性が私的領域から出て、公的な集団世界に入るまで」という同じテーマを描いたものであること、そして『姉妹』、『ワシリーサ・マルイギナ』、『三代の恋』の順で、ヒロインは段階的に進化しているものとする。ここで重要となるのが「女と女の関係性」である。三作のうち、短編小説『姉妹』では、二人の女が同じ苦しみを分かち合う者として、文字通り〈姉妹〉的な同盟を結ぶのだが、この麗しき関係は中編小説『ワシリーサ・マルイギナ』であっけなく断ち切られる。そして最終的に『三代の恋』では〈母娘〉の関係も分断され、女の縦横の全ての絆は成立不可能となるのだが、このような分断を経て、ヒロインは初めて、公的な男たちの集団世界へと参入することが可能になっている。

また『働き蜂の恋』という小説集のタイトルが何を意味するのかについて、生物学者イリヤ・メチニコフによる女性の進化理論にもとづいて検討する。メチニコフは、ミツバチのメスには、生殖のみに従事する女王蜂と、生殖能力を持たず労働に従事する働き蜂の二種類がいることを指摘し、人間の女も労働に従事するようになれば、女から男へと「進化」し、いずれ生殖能力を失うだろうと予言している。コロンタイの小説の三人のヒロインたちも、この論理に沿う形で、労働者になるにつれ、生殖能力を失っていく。つまり、コロンタイの女性解放のプランの射程には、女の身体構造の変化がその射程に含まれていたことが確認されるのだ。

さらに、本章のもう一つの大きな目標は、『三代の恋』のヒロイン、ジェーニャによる乱交的な性行動の意味を解釈することにある。この分析に際して援用することになるのは、ジュディス・バトラーのアンティゴネー神話の再解釈である。周知のように、ギリシャ神話のアンティゴネーとは、兄の弔いという国家に禁じられた行為を遂行した為に命を落とした女である。「国家の法」よりも「親族の法」を重んじたヒューマニズム的行為から、彼女はこれまで家族を守る英雄として解釈されてきた。しかしバトラーは従来の解釈を覆し、アンティゴネーが兄を埋葬し、その権利を堂々と主張したことは、兄への近親姦的欲望の遂行であり、このことによりアンティゴネーは親族体系を乱す表象となっていると主張する。つまり、近代の強制的異性愛に基づく家父長的家族が、近親姦タブーを起点として構築されたシステムであることを考えた時、アンティゴネーがこのタブーを犯し、またその権利を主張したことで、〈父-母-子〉というエディプス的家族は攪乱され、親密な人間関係のオルタナティブが発生する可能性を生み出しているとする。この考えを踏まえた上で、ジェーニャの性行動を見た時、彼女が自分の母親の新しい夫（つまり自分の父）と関係を結び、またその権利を主張したことの意味は、家父長的家族を内部から瓦解させるラディカルな行為であったといえるのだ。纏めるならば、前半では、女を私的領域（家族）から公的領域（集団世界）へ移行させるプロセス、そして後半では、私的領域（家族）を内部から破壊するプロセスを見ていくことになる。

第三章 「エロスの革命」

この章では、1920年代の性愛の議論を扱う。ここまでのところで、コロンタイが近代の核家族を消滅させ、労働者全員が兄弟となる一なる共同体創設を目指していたことを確認してきた。これは言わば私的領域（家族）のない公的領域のみの一元的世界を創り出すことを意味したが、ここで問題となるのが「性愛」である。つま

りフーコーの議論に従うなら、近代は「法的に結ばれた夫婦のベッド」を性愛の唯一の正当な場と認めることで、社会的秩序や個人の主体が生成されてきた訳であり、家族（とその内部の私的なベッド）が消滅した後に、性愛／エロスは、公的空間を彷徨うことになるのである。革命以後、1920年代を通じて、性の議論は異常な盛り上がりを見せるが、それは性愛に新しい正当な場を探す動きであったと言え、その議論の中心にいたのがコロンタイであった。

ここで取り上げるのは、彼女の性愛論の集大成である「翼の生えたエロスに道を！」（1923）である。この論文は、自由恋愛や男女の平等を謳ったものとみなされてきたが、そういった解釈はいずれもコロンタイの議論をロシアの文脈から離して検討している為、表面的な理解にとどまっている。本研究では、論文のタイトルの「翼の生えたエロス」とは、プラトンの概念であること（つまりイデア界と現実界を媒介するエロスが念頭に置かれていること）を指摘した上で、さらにプラトンのエロス論をロシアに移植したソロヴィヨフの「愛の意味」との比較を行っていく。この考察を通じ明らかになることは、彼女の議論が、ブルジョワ体制のもとでは、核家族をつくり出すエネルギーであったエロスの力を、集団世界全体をつなぐエネルギーへと変換することを求めた内容であったということだ。

後半では、彼女の性愛論に対して起こったリアクションをみていく。コムソモルの若者から絶大な人気があったコロンタイは、共産主義社会における恋愛の伝道師と見なされ、論文「翼の生えたエロスに道を！」も熱狂的に読まれることになる。他方で、彼女の記述は非常に抽象的であり、殆どの場合、正しく理解されず、アナーキーな性愛の称揚と誤解され、さらには批判にもさらされている。ここでは数ある批判の中で最も激しい議論を展開した児童学者アーロン・ザルキントを取り上げる。彼は、国家権力による性愛の取締という超保守的な内容含む「性の12か条のドグマ」を発表したことで知られており、これまでコロンタイの性の解放に対する反動として解釈されてきた。しかし詳細に検討すると、両者は「性愛を集団世界建設に役立てなくてはならない」という点において、全く同じ論理を展開していることが指摘できる。では何故彼はコロンタイを批判したのか、という問いを、エリック・ナイマンの議論を参照しつつ検討する。そこで見えてくるのは、ネップ期特有の不安なメンタリティーである。また本章の最後には、コロンタイとザルキントの両者を痛烈に批判するアンドレイ・プラトノフの「アンチセクスース」（1926）という作品を取り上げる。彼は、コロンタイとザルキントの議論の行き着く先が、マスターベーションという他者との接触を一切伴わない性だけが残る孤独なアンチユートピアとして描いている。

第四章「父性の復権」

本章では、コロンタイが国内政治から撤退した後の初期ボリシェヴィキにおける女性や集団主義に関するラディカルな考えが変質していく様を描き出す。ここで分析の対象となるのは、1926年前後に発表された三つの作品、フョードル・グラトコフの小説『セメント』（1925）、アブラム・ローム監督、ヴィクトル・シクロフスキー脚本の映画『第三メシチャンスカヤ通り』（1927）、セルゲイ・トレチャコフ作、フセヴォロド・メイエルホリド演出の戯曲『子どもが欲しい』（1927）である。1926年とは、ソ連における家族や性愛の議論の転換点であった。この年に起きた、世間を震撼させた集団レイプ事件（チュバーロフ事件）と、国中を巻き込む大議論となった家族法改正への動きを通じて、初期ボリシェヴィキの家族消滅の議論

は、保守化へと進むことになる。上述の三作品で描かれたヒロインたちは、いずれもコロンタイの描いたジェーニャ（『三代の恋』）とワシリーサ（『ワシリーサ・マルイギナ』）という「新しい女」の遺伝子を受け継ぐものとして登場するのだが、物語が進行するにつれ、その性格を徐々に変質させてゆく。

グラトコフ『セメント』では、ヒロインのダーシャをファリック・マザー幻想の産物として、ラカン派の精神分析による解釈を試みる。ダーシャも、ジェーニャ同様に性を超越し、世界を攪乱する超越的な力を有するのだが、しかし最終的にはその力を失い公的な集団世界から排除される結末になっている。次に扱う映画『第三メシチャンスカヤ通り』においては、女の母性が称揚されるような展開があり、ヒロインのリュードも世界から排斥されてしまっている。三つ目の戯曲『子どもが欲しい』においても、タイトルが明示するように、ヒロインのミルダは子どもを持ちたいという「自然な感情」を持つ母性的女へと変貌している。

またこれらの作品の中で、男たちの父性の喪失に対する不安が描かれていることにも着目したい。初期ソ連の家族政策を推進するにあたって、繰り返されたプロパガンダは、「自分だけの子どもに向けるエゴイスティックな母性を放棄し、全ての子どもの母となれ」というものであった。しかし家族消滅が達成された時、本当に消滅してしまう可能性があるのは、母性ではなく父性であり、この男たちの不安が家父長的家族を復権させる一つの要因となる。コロンタイの夢見た父なき水平的な兄弟だけの集団世界は、家父長的家族へと回帰する。というよりも、この家父長的原理は以前より強化され、一人の強大な父を擁立する大家族へと向かっていくことが予感される。